

外国の文献から

『心情と知性の教育』

—日本の就学前と小学校教育に関する考察—

第七章 子どもの学び

小倉 定枝

「何か変だと思わない？」

「……………」

「太郎ちゃんのお靴、何か変だと思わない？」

「……………」

「太郎ちゃん、お靴をよく見て。いつもの太郎

ちゃんのお靴と同じかなあ？ 違うかなあ？」

「……………」

筆者は日本の幼稚園で観察中のある日、三歳児と保育者との間に右記のようなやりとりを見た。

外で遊ぼうと靴をはいた太郎ちゃんは、その靴を

左右反対にはいてしまっている。これを見た保育者は、太郎ちゃん自らがその間違いに気づくように、懸命にヒントを出し続けている。しかし、当の本人はなかなか気づいてくれない。それでも保育者はあきらめず、ヒントを出し続け、この後、およそ三分間も、同じようなやりとりが続いた。結局、太郎ちゃんが「もう行って、遊んでいいよ」という許可をもらって、このエピソードは幕を閉じることになる。

これは、やや極端な例ではあるが、日本の幼稚園や小学校では保育者や教師が、子ども自身が考えるこのような機会を作ることが頻繁に見られる。その際、子どもの興味や経験にそくして言葉をかけていることが大きな特徴であるといえる。アメリカでは教師が子どもの間違いを目撃したら、すかさず注意をしてストレートにその間違いを正すことが多いので、日本に來た当初このようなエピソードに遭遇してかなり驚いた。

日本の子どもは、理科と数学の国際的なテストで非常に高いランクにあり、世界の注目を集めている。では、どうして、日本の子どもは理科と数学においてそのような世界的に高いランクにあるのだろうか。第七章では主に日本の子どもたちの学習方法や学習体験について述べていく。冒頭に挙げたエピソードに見られるような、保育者の考え方も子どもたちの学習成績に少なからず関係しているのは確かである。

小学校の授業

では、実際に行われた授業の例として平林先生の小学校一年生の理科の授業を見てみよう。ここで取り上げる平林先生の授業のテーマは「もの浮き沈み」である。

平林先生の授業は、子どもたちが自分の家からプラスチックのボトルを持参することから始まった。子どもたちは自分が持ってきたボトルについ

て口々に、

「これは、僕が一番好きなジュースの瓶なんだ」とか、

「僕はこれが好きなんだよ。僕のお父さんも」

などと言いつ合っている。そんな子どもたちに平林先生は次のような言葉を投げかけた。

「そのボトルを飾り付けてボートを作ろう。そのボートの中に砂を入れて、流して見ようね。どうすれば、ボートがうまく流れるかなあ。いい飾り付けを考えて見よう」

子どもたちは班ごとに、ボートの飾り付けや、どうすればボートがうまく流れるのかを考えて、色紙やマジックペンを使ってそれぞれの班のボートを作った。出来上がったボートは、ドラゴンもあれば、ヨーロッパのお城あり、キャンディボートあり、海賊船ありで色とりどりだった。その日は、それぞれの力作を称賛しあって一日が終わった。

その翌日、

「さあ、どのくらい砂を入れたら、ボートがうまく流れるかな」という平林先生の問いに
応じて、子どもたちは
思い思いにボートの中
に砂を詰めた。

次はいよいよボートの試運転である。学校の池に自分たちの作ったボートを流した子どもたちの反応は様々であった。

「あー、水がボートをひっくり返したー」

「うひゃー、ウルトラマンが沈んじゃったよー」

「ゴジラが水浸しだー」

「いけいけ、流れるー」

結果は、悲喜こもごもであった。それぞれのボートを回収して教室に戻った時、平林先生は次のように言った。



「誰のボートがうまく流れた? もう一度やるとしたら、誰のボートをお手本にしたい?」。およそ二十分間、子どもたちは互いに、どのボートが沈んだのか、どのボートがうまく流れたのか、どうしてそうなったのか話し合った。平林先生は、子どもたちから出たアイディアをいくつか挙げて、

「どうすればボートはうまく浮かぶかな?」と子どもたちに問いかけた。

最後に、子どもたちが班ごとに、もう一度ボートを作るとしたら、どのように飾り付けて、どれぐらい砂を入れればいいのか話し合って、その授業は終わった。

アイディア中心の学び

この授業に見られる特徴をいくつか挙げてみよう。まず、授業が先生の導入をきっかけにして、子どもたちのアイディアを中心に進められている

ことが挙げられる。筆者からみれば、この理科の授業が「ものの浮き沈み」という本論に入る前に、ボート作りに二時間もの時間を費やしていることは驚きである。しかし、この導入部分に時間をかけたからこそ、平林先生は子どもたちの興味を引き出すことに成功しているのである。また、先生は子どもたちが答えを見つけたすまでに、決して明確な答えを言っていない。あくまでも、子どもたち自身の力で考えることを重視しているのである。

学びの場

また、子どもたちは自分一人で考えるのではなく、他の友達と何度も話し合って意見を交換している。この意見の交換が行われることによって、授業が活発になる。さらに、子どもたちは自分とは違う考えを聞くことによって、いろいろなアイディアに触れることができるのである。子どもたちの生活の上で、班が重視されているばかりでな

く、学習においても班は重要な役割を果たしているといえるだろう。

過程と創造

この授業の三つ目の特徴は、過程と創造が重視されていることである。この授業の中では、子どもたちがポート作りに興味を持って取り組むことから、どうしてもものの浮き沈みが起こるのかを学ぶ結果にいたるまでの過程に多くの時間が費やされている。筆者は、日本の授業では、子どもたちがある学問的な技術や知識を身につけるといって「結果」ではなく、自分で考えることを導きます。「過程」を大切にしていることに注目したい。答えをすぐに教えてしまうアメリカの授業が、「迅速型」であるのに対して、遠回しに答えを気づかせる日本の授業は、「ねちねち型」だといえる。

反省

平林先生の理科の授業に見られるように、日本

の小学校の授業には

「反省」がつきものである。まず、自分一

人、もしくは班ごとに

反省を行って、その反

省をクラスのみんなに

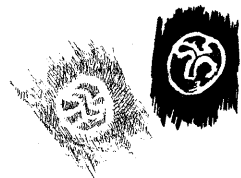
発表する。時に、先生

は自分自身の考えを子どもたちの反省につけ加えることがあるが、疑問を残したまま終わってしま

う授業もある。

多様性の享受

平林先生の授業からもわかるように、日本の小学校の算数と理科の授業は、機械的な暗記や反復練習を重視しているアメリカのそれと違って、かなりアクティブなものであるようだ。その他にも筆者は、「朝顔の観察」「花や果物の汁しぼり」「カニの死骸から出る腐臭の原因を探る」「キュー



リの花から出る白い粉（花粉）について調べる」など、おもしろい授業を数多く目にした。

ただ、筆者が疑問に感じているのは、そのアクティブな授業が「算数」と「理科」に限られていることである。美術、音楽、体育などの学問的ではない授業では、アメリカよりもよりシリアスな形で行われているようにみえる。その他にも、日本の学校の中には物事を正しく行う枠組みがあり、「適切な」答えが存在しているようだ。例えば、ある授業で先生の、

「冬という季節で思い浮かぶものを挙げてみよう」という問いに対して、

「クリスマス」と答えた子どもがいた。しかし、先生はその答えに対して、

「もっと、日本的なものはないかな?」と言って、「適切な」発言を求めている。また、

「お母さんの仕事を挙げてみよう」という問いに対して、外で働いていることを述べた子どもがい

た。しかし、先生はこの発言を無視して、家事についてのコメントのみを取上げていた。

つまり、算数と理科においてのみ、アメリカよりも日本の方が多様性に関して柔軟であるといえるのである。このことが、日本の国際的なテストの結果に反映しているかどうかは定かではない。しかし、日本の学校では協調性を重視しすぎて、個人の権利や多様性の享受が軽視されているのではないだろうか。

近年、日本の小学校では、授業を機械的な勉強ではなくよりアクティブで創造的なものにしようという試みがなされている。このことで、小学校の授業がより幼稚園や保育園の保育に近づいていっているようにも思える。その中で、いかに子どもの多様性を教師が大切にしていくかが、これからの課題であるとも言えるであろう。

（お茶の水女子大学大学院）